

カビテにおけるスペイン語系クレオール話者の現状について

荻原 寛

0. 序

本稿は、本学国際文化経済研究所の助成金を得て、1996年1月29日から2月3日にかけてフィリピンのカビテ市（Cavite）で行った現地調査の結果に基づくものである。俗にチャバカノ Chabacano / Chavacano と総称されるスペイン語系クレオールに属すカビテ語（caviteño）は、年々進む話者の高齢化と後継者不足により死語化が危ぶまれている。こうした現状を前に、今回の調査には大きく分けて二つの目的があった。ひとつは、アンケートにより、話者が多言語併用（multilingual）社会でどのような使用領域（domain）に従ってコードの切替え（code switching）を行っているかを明らかにすることであり、もうひとつは、カビテ語の復興に様々な形で尽力している活動家三名にインタビューして、衰微する言語を前にした市民や行政側の動きを探ることであった。カビテ州の人口約15万人中約15%、あるいは一説によると約2万8千人がカビテ語話者だと言われている¹⁾。今回はそのごく一部を対象とした調査であったが、話者の現状を知る上で十分な数値を得られたと思う。

1. カビテ語話者の多言語併用と

コードの切替え

1. 1. アンケートの実際

アンケートは、小学校教諭を定年退職後、カビテ市立図書館員として歴史資料室に勤務している Purificacion N. Ballesteros 女史の協力を得て、同市の市街地に住む住民を中心に実施された。対象はカビテ語話者に限り、本人との質疑応答のなかで筆者が記入していく方法と、予め回答者に用紙を渡しておいて後刻または後日回収する方法とを取った。そのため、後者の場合に、年齢が記入されていなかったものが2例、出身地が不明なものが1例、また回答に疑義のあるものが3例出たが、全体の構図を知る上で支障を来すほどの数ではなかった。質問は、①個人レベルにおける言語運用能力と区別的多言語併用（polyglossia）の実際（質問D E F）、②話者の幼少期から現在に至る家庭内の言語環境の変化あるいはカビテ語話者の推移（質問G H）、③現在の家庭内におけるカビテ語使用の実際（質問I J K L）、④コミュニティー内におけるカビテ語使用の実際（質問M N O P）の四つのポイントに絞って行われた。アンケート内容は以下に掲げたとおりであるが、話者の意思により必要な情報を自由に書き加えてもらった。

QUESTIONNAIRE ON THE USAGE OF CAVITEÑO 1996

- A. Sex : Male Female
 B. Age : _____
 C. Birthplace : _____
 D. What languages do you speak besides Caviteño ?
 1. Tagalog 2. English 3. Bikolano 4. Visayan 5. Hiligaynon 6. others
 E. Which language do you use to express emotions such as pleasure, anger, sadness, etc.
 1. Caviteño 2. Tagalog 3. English
 F. In which language do you speak to God ?
 1. Caviteño 2. Tagalog 3. English
 G. Who spoke Caviteño in your family when you were a child?
 1. father 2. mother 3. grandfather 4. grandmother 5. brother 6. sister 7. uncle 8. aunt 9. cousin
 H. Who speaks Caviteño in your family?
 1. wife 2. husband 3. father 4. mother 5. son 6. daughter 7. grandfather 8. grandmother
 9. grandson 10. granddaughter
 I. In which language do you speak to your wife / husband ?
 1. Caviteño 2. Tagalog 3. English
 J. In which language do you speak to your parents ?
 1. Caviteño 2. Tagalog 3. English
 K. In which language do you speak to your children ?
 1. Caviteño 2. Tagalog 3. English
 L. In which language do you speak to your brothes / sisters ?
 1. Caviteño 2. Tagalog 3. English
 M. In which language do you speak to your neighbors ?
 1. Caviteño 2. Tagalog 3. English
 N. In which language do you speak to your friends ?
 1. Caviteño 2. Tagalog 3. English
 O. Which language do you use for the trading ?
 1. Caviteño 2. Tagalog 3. English
 P. Which language do you use to write a private letter ?
 1. Caviteño 2. Tagalog 3. English

1. 2. アンケート結果

1. 2. 1. 話者の言語運用能力

話者の言語運用能力について見ると、フィリピンは多言語併用社会であって、カビテ市ではカビテ語のほかに、国語であるフィリピン語すなわちタガログ語²⁾と公用語である英語³⁾が話されている点を考慮しなければならない。また、カビテ市はスペイン統治時代は海軍工廠と基地の町として重要であり、アメリカの植民地時代は勿論のこと、1946年の独立以後も、1991年9月に新基地条約批准が上院で否決されたのを受けて翌1992年11

月に米軍が完全に撤退するまでの間アメリカ海軍基地として、その後はフィリピン海軍の有力な基地の町として位置づけられているので、軍施設や関連企業に職を求めて各地から移住者があったと想像される。そこで、選択肢としてタガログ語と英語に加え、フィリピン諸語の中でタガログ語に次いで優勢なビコル語、ビサヤ語、ヒリガイノン語を配した。結果としては、39名のうち30名がカビテ語以外にタガログ語と英語を話し、5名がタガログ語と英語に加えてスペイン語を、1名がタガログ語、英語、フランス語を話す、残り2名

カビテにおけるスペイン語系クレオール話者の現状について

がカビテ語以外にはタガログ語しか話さないと答えている。フランス語を話す27歳の男性回答者は学習によりフランス語を習得したと述べているように、コミュニティではフランス語は多言語併用の構成要素として成り立っていないので、分類上、三言語併用話者30名に加えるべきであろう。分布から見ると、スペイン語も話すカビテ語話者は高齢者に限られている点が注目される。

内的言語を同定する際に、無意識に口を突いて出る感情表現で使われる言語と、神への祈りを捧げる時の言語が判断基準とされるが、回答を見る限り、カビテ語話者の多くがこのような場合にも多言語を併用しているのが観察される。Harding & Riley (1993: 22, 31) によれば、二言語併用話者の場合、二つの言語は各々の使用目的にしたがって使い分けられ、両者が完全に重なることは極めて稀であり、その言語運用能力についても同

程度と断定するのは難しいという。また、Edwards (1994: 3) は、一人の話者が使用領域と社会層に応じて言語を使い分けている事実は、これらの言語の運用能力がその話者の中で等しく発達している必要がないことの現れだと述べている。Holmes (1992: 44) もこうした多言語併用におけるコードの切替えについて触れ、一つの言語が他の言語に優先される理由として、言及内容によりその言語を用いたほうがより適切かつ簡単に表現できるためだと指摘している。感情表現と神への祈りに用いる言語を問う質問EとFに対する回答は、こうした説の正しさを裏付ける結果となっている。つまり、多言語併用社会における多言語話者の場合、内的言語が一言語に限定される例のほうが少ない。逆に言えば、母語が二つ以上という例が珍しくないのである。

	A	B	C	D	E	F
1.	m	25	Cav.	T. E.	C. T. E.	T. E.
2.	m	27	Cav.	T. E. F.	T. E.	T. E.
3.	f	30	Man.	T. E.	T. E.	T. E.
4.	f	33	Cav.	T.	C.	?
5.	m	37	Cav.	T.	T. E.	T.
6.	m	38	Cav.	T.	E. T.	T.
7.	m	38	Cav.	T. E.	C. T. E.	T. E.
8.	f	39	Cav.	T. E.	C. T.	T. E.
9.	f	41	Cav.	E.	C.	E.
10.	m	42	Cav.	T. E.	T.	T. E.
11.	f	44	Cav.	T. E.	C. T.	C. E.
12.	m	45	Cav.	T. E.	T.	T.
13.	m	45	Cav.	T. E.	C. T.	C. T. E.
14.	f	48	Cav.	T. E.	C. T.	T.
15.	m	49	Cav.	T. E.	C. T. E.	T. E.
16.	f	53	Cav.	T. E.	C. T.	T. E.
17.	m	54	Cav.	T. E.	T. E.	T. E.
18.	m	56	Cav.	T. E.	C. T. E.	E.
19.	m	57	Cav.	T. E.	C. T. E.	T. E.
20.	f	58	Cav.	T. E.	C. E.	C. T. E.
21.	f	59	Cav.	T. E.	C. T.	C. T. E.

22.	?	59	Man.	T. E.	T.	T.
23.	m	62	Cav.	T. E.	C. T.	T.
24.	f	64	Cav.	T. E.	T.	T. E.
25.	m	64	Cav.	T. E.	C. T. E.	T. E.
26.	f	64	Ban.	T. E.	C.	E.
27.	m	71	Cav.	T. E.	C.	T.
28.	f	72	Cav.	T. E. S.	C. T.	T. E. S.
29.	f	74	Olon.	T. E.	C. T.	T. E.
30.	m	75	Cav.	T. E.	C. T.	C. T. E.
31.	f	75	Cav.	T. E. S.	C. T.	T. E. S.
32.	m	77	Cav.	T. E.	C. T.	C. T. E.
33.	f	79	Cav.	T. E. S.	C.	T. E. S.
34.	f	82	Cav.	T. E.	T.	T.
35.	f	83	Cav.	T. E.	E.	E.
36.	f	83	Cav.	T. E. S.	C. T. S.	S.
37.	f	89	Cav.	T. E. S.	E.	C.
38.	f	?	Cav.	T. E.	C. T.	E.
39.	m	?	Cav.	T. E.	C. T. E.	T. E.

m=male f=female Cav. =Cavite Man. =Manila Olon. =Olongapo⁴⁾

Ban. = Bantayan⁵⁾

C. =Caviteño T. =Tagalog E. =English S. =Spanish F. =French

表1：個人レベルの多言語併用状況

質問Eへの回答でカビテ語を挙げたのは39名中27名であるが、その中でカビテ語だけを単一に挙げたのはわずかに5名である。これをタガログ語だけを単一に挙げた6名と英語だけを単一に挙げた2名と比べると、カビテ語を単一の母語とする話者の数は極めて少なく、多くのカビテ語話者にとってカビテ語は多言語併用の一構成要素に過ぎないことが分かる。また、表1の分布状態から見て、カビテ語が神への祈りよりも感情表現に多く使われることが分かるが、このことはコミュニティーにおける区別的多言語併用(polyglossia)の存在を示している。カビテ語を始めとするマニラ湾沿岸部のスペイン語系クレオールは、スペインまたはメキシコ副王領出身の統治者およびそれに準ずる支配階級であった一部混血層の間でスペイン語が行われている環境下で、タガログ族の庶

民階級の中に育まれてきたものであった。このことは、当時すでにスペイン語、クレオール、タガログ語の順に高位変種(H言語)から低位変種(L言語)⁶⁾へと階層が移る区別的多言語併用が形成されていたことを示している。そこではスペイン語がクレオールに対して常に傍層(abstratum)として影響を与えていたし、タガログ語に対しても、語彙面において約1万語⁷⁾を供給している点から見て同様に傍層として存在していたと言ってもよい。1925年以降、高等学校および大学における教育が英語のみで行われるようになり、35年憲法以来公用語としての地位を保ってきた英語が従来が多言語併用社会に加わると、英語がH言語としてスペイン語に取って代わったが、カビテ州では教会の典礼用の言語としてスペイン語は今でも英語より高い階層を与えられている。スペイン語を

カビテにおけるスペイン語系クレオール話者の現状について

母語の一つとした5名のうち4名が、質問Fに対する回答にスペイン語を加えた理由はこうした背景によるものと推測される。そして、彼らのうちいずれもが神への祈りにカビテ語を用いていない点に、スペイン語をカビテ語より高位とする価値基準が窺えて興味深い。

1. 2. 2. 家庭内の言語環境の推移

Asuncion-Landé & Pascasio (1979: 219) は、フィリピン人の言語習得の主要な場として、家庭、小学校、中高等学校、大学または専門学校の四つを挙げている。もちろん、この他にも、生まれ育った地区の言語環境や交遊関係なども習得の場であるし、そこが区別的他言語併用社会なら

ば多数派の言語を習得する必要性などさまざまな要因を考慮しなければならないが、学習の度合いの濃密さから言えば、家庭は話者が最初に母語に曝される一次的言語環境である。しかし、家族構成は非常に流動的で、結婚、出稼ぎ、移民、別居あるいは死別などにより、構成員に異動が生じるのが普通である。質問GとHはそうした構成員の推移を問うものであるが、核家族が一般的であっても一族が近くに住んで血縁関係者同士が助け合うのが普通であるフィリピン社会⁸⁾では、質問中のfamilyは家庭よりも広い意味で解釈された可能性もある。

	A	B	C	G	H
1.	m	25	Cav.	f gf gm u a	f gf gm
2.	m	27	Cav.	f m gf gm b ss u a c	f m
3.	f	30	Man.	f m gf gm u a	f m gf gm
4.	f	33	Cav.	f m gf gm b ss u a c	h f m s gf
5.	m	37	Cav.	m b ss u a c	m b ss
6.	m	38	Cav.	m gf gm u a c	m gm
7.	m	38	Cav.	m gf gm ss u a c	f m gf gm
8.	f	39	Cav.	f m gf gm b ss u a c	h m d
9.	f	41	Cav.	f m b ss	h s d
10.	m	42	Cav.	f m gf gm b ss u a c	w m
11.	f	44	Cav.	f m gf gm b ss u a c	h f m s d gf gm gs gd
12.	m	45	Cav.	ss	/
13.	m	45	Cav.	f m gf gm u a c	f m s d gf gm
14.	f	48	Cav.	f m gf gm b ss u a c	f m
15.	m	49	Cav.	f m u a	w f m
16.	f	53	Cav.	m gf gm b ss u a c	d f m
17.	m	54	Cav.	/	/
18.	m	56	Cav.	f m gf gm b ss u a c	f m nc
19.	m	57	Cav.	f m gf gm b ss u a c	f m gf? gm?
20.	f	58	Cav.	f m gf gm b ss u a c	h f m s d gs gd
21.	f	59	Cav.	f m gf gm b ss u a c	m b ss
22.	?	59	Man.	m gf gm b ss u a c	m gf? gm?
23.	m	62	Cav.	f m gf gm b ss u a c	w f m s d gs gd
24.	f	64	Cav.	/	/
25.	m	64	Cav.	f m gf gm b ss u a c	w f m s d

調査と研究 第27巻

26.	f	64	Ban.	f m gf gm b ss u a c	f m
27.	m	71	Cav.	f m gf gm b ss u a c	w s d gs gd
28.	f	72	Cav.	f m gf gm b ss u a c	f m s d gs gd ss
29.	f	74	Olon.	f m gf gm b ss u a c	f m b ss
30.	m	75	Cav.	f m gf gm b ss u a c	w s d gs gd
31.	f	75	Cav.	f m gf gm b ss u a c	f m s d gs gd ss
32.	m	77	Cav.	f m gf gm b ss u a c	w s d gs gd
33.	f	79	Cav.	f m gf gm b ss u a c	h s d
34.	f	82	Cav.	f m b ss	f ? m ?
35.	f	83	Cav.	f m gf gm b ss u a c	h
36.	f	83	Cav.	f m u a c	h s d
37.	f	89	Cav.	f m gf gm b ss u a c	h s d gs gd
38.	f	?	Cav.	f m gf gm b ss	f m s d gf gm
39.	m	?	Cav.	f m gf gm ss u a c	f m gf gm ss

f=father m=mother gf=grandfather gm= grandmother b=brother
 ss=sister u=uncle a=aunt nc=niece h=husband w=wife s=son
 d=daughter gs=grandson gd=granddaughter

表2：家庭内のカビテ語話者の推移

表2によると、幼少期の言語環境で両親ともにカビテ語話者だったのは、該当なしの2名を除く37名中31名で、回答者が高齢ほどその割合が高まっているのが分かる。しかし、片親のみをカビテ語話者と答えた5名の場合、生まれたときから片親がカビテ語話者でなかったと断定することはできない。親との死別や別居、話者が孤児であったなど、家庭による様々な事情が考えられるからである。そうしたアンケートには現れない家庭の事情は、姉妹だけがカビテ語話者だった45歳の男性回答者や、質問Gに現れていない父親が質問Hに現れている38歳の男性回答者の例に窺うことができる。該当なし、すなわち家庭内ではカビテ語が話されてこなかったと答えた2名について言えば、二次的言語環境である学校や交遊関係のなかでカビテ語を習得していったものと思われるが、その動機付けについては不明である。

次に、現在の家庭内ではどのような多言語併用が行われているかを尋ねたのが質問IからLであ

る。表2と表3の対比から、回答者が家族構成員の一人一人とどの言語を用いて談話しているかが浮かび上がる。前述したように、多言語併用社会ではある言語の運用能力があっても、使用領域や話題などによって他の言語へのコードの切替えが行われているからである。また、過去にカビテ語を母語としていた家族構成員が、現在もその言語運用能力を維持しているか、あるいは他の土地に移り住むなどの理由からカビテ語を使わなくなり、被験者との談話にも他の言語を用いているかをも対比により窺うことができる。

カビテにおけるスペイン語系クレオール話者の現状について

A	B	C	I	J	K	L
1.	m	25 Cav.	C. T.	C. T. E.	C. T. E	C. T.
2.	m	27 Cav.	/	C.	/	T. E.
3.	f	30 Man.	/	T.	/	T. E.
4.	f	33 Cav.	C. T.	C.	C.	C.
5.	m	37 Cav.	T.	C. T.	T.	T.
6.	m	38 Cav.	/	C. T.	/	/
7.	m	38 Cav.	T. E.	C. T. E.	T. E.	C. T. E.
8.	f	39 Cav.	C. T.	C.	C.	C.
9.	f	41 Cav.	C.	/	C.	C.
10.	m	42 Cav.	T.	C. T.	T.	C. T.
11.	f	44 Cav.	C.	C. T. E.	C. T.	C. T.
12.	m	45 Cav.	T.	T.	T.	T.
13.	m	45 Cav.	C. T.	C. T.	C. T.	/
14.	f	48 Cav.	T.	C. T.	T.	C. T.
15.	m	49 Cav.	C. T.	C. T.	C. T.	/
16.	f	53 Cav.	T.	C.	C. T.	C.
17.	m	54 Cav.	T. E.	T. E.	T. E.	T. E.
18.	m	56 Cav.	/	C.	/	C.
19.	m	57 Cav.	T.	C. T. E.	T. E.	C. T. E.
20.	f	58 Cav.	C.	C.	C. T.	C.
21.	f	59 Cav.	/	C. T. E.	/	C. T. E.
22.	?	59 Man.	/	C.	/	C. T.
23.	m	62 Cav.	C.	C.	C. T.	C.
24.	f	64 Cav.	/	T.	/	T.
25.	m	64 Cav.	C.	C. T. E.	C. T. E	C. T. E.
26.	f	64 Ban.	/	C. T.	/	C. T. E.
27.	m	71 Cav.	C.	C.	C.	C.
28.	f	72 Cav.	/	C.	C. T.	C. T. E.
29.	f	74 Olon.	/	C. T.	/	C. T. E.
30.	m	75 Cav.	C.	C.	C.	C.
31.	f	75 Cav.	/	C.	C. T.	C. T. E.
32.	m	77 Cav.	C.	C.	C.	C.
33.	f	79 Cav.	C. S.	S.	C. T.	/
34.	f	82 Cav.	/	C. T.	T.	C. T.
35.	f	83 Cav.	/	C. T.	/	C. T. E.
36.	f	83 Cav.	C.	S.	C. T.	/
37.	f	89 Cav.	C. S.	C.	C.	C.
38.	f	? Cav.	T.	C.	C. E.	C. E.
39.	m	? Cav.	/	C. T.	/	C. T.

C. =Caviteño T. =Tagalog E. =English S. =Spanish

表3：現在の家族内の多言語併用状況

質問 I は配偶者の言語運用能力を問うものである。39名中既婚者は29名であるが、そのなかには4名の寡婦が含まれているので、その分は該当な

しとして処理した。都合25名中16名が配偶者との談話にカビテ語を用いているが、カビテ語のみ使用しているのは9名で、残りはカビテ語とタガロ

グ語の二言語併用が5名、カビテ語とスペイン語の二言語併用が2名である。また、配偶者との談話にカビテ語を用いない9名中、タガログ語と英語の二言語併用が2名、タガログ語のみ使用が7名である。興味深いのは42歳の男性回答者の場合、妻はカビテ語の言語運用能力があるにもかかわらず、夫婦間の使用言語はタガログ語に限られている。この回答者は子供との談話にもタガログ語のみ用いており、カビテ語を使う相手は家庭内の母親と家庭外の兄弟姉妹に対してだけである。しかも、その場合にすらタガログ語との併用なので、カビテ語は三世代後にはこの家庭から消滅しているであろう。逆に、配偶者の母語がカビテ語でないにもかかわらず、カビテ語を併用している25歳と45歳の男性回答者の例では、カビテ語を存続していこうとする意図が感じられる。

質問Jは親との談話に使う言語を問うものであるが、70歳以上の高齢者には親が存命中の時代を回想して答えてもらった。39名中32名がカビテ語を挙げているが、その中でカビテ語のみと答えたのが半数に満たない15名で、その他はカビテ語とタガログ語の二言語併用が11名、カビテ語とタガログ語と英語の三言語併用が6名、タガログ語と英語の二言語併用が1名、タガログ語のみが3名、そしてスペイン語のみが2名である。79歳と83歳の女性回答者の両親はスペイン語が母語であったが、ことに83歳の女性回答者の場合は、交遊関係や地区での生活で習得したカビテ語を両親に対して用いると厳しく叱られたという。これは、当時スペイン語を区別的多言語併用において高位変種（H言語）とみなしていたことを証左する貴重な報告である。

質問Kは子供に対して使う言語を問うものであ

るが、表3から明らかなようにカビテ語が使われる度合いが夫婦間に次いで低い。子供のいる回答者28名中カビテ語のみと答えたのは四分の一の7名である。これを質問Iの回答と対比すると、夫婦間でカビテ語のみで談話している9名のなかの2名が、子供との談話にタガログ語を併用していることが分かる。他はカビテ語とタガログ語の二言語併用が10名、カビテ語とタガログ語と英語の三言語併用が2名、タガログ語と英語の二言語併用が3名、タガログ語のみが5名である。稀な例として、年齢不詳の女性回答者がカビテ語と英語を併用していると答えているのが注目される。この女性は表1で見るとタガログ語の言語運用能力があるにもかかわらず、子供との談話にタガログ語を用いていないのである。ただし、質問EとFについてはそれぞれカビテ語と英語の併用と英語のみと答えているので、タガログ語よりもカビテ語と英語の方が堪能なのであろうと想像される。

カビテ語の伝承という面から見ると、表2の質問Hに対する答えではカビテ語運用能力のある子供が18名しかいないはずであるが、実際に子供とカビテ語を用いて談話しているのは質問Kの回答では20名になっている。具体的には前出25歳の男性回答者と49歳の男性回答者の家庭で、おそらく子供のカビテ語の言語運用能力は母語とみなすには不十分であっても、カビテ語を存続させたいという願いから、少なくとも相手の話の内容がある程度理解できるまでの能力を養成するため、子供にカビテ語を交えて話しかけているのであろう。因みに前者はタガログ語と英語と併用、後者はタガログ語と併用している。また、これら20名のうち半数の11名が孫との談話にもカビテ語を使用し

カビテにおけるスペイン語系クレオール話者の現状について

ているが、逆に孫はタガログ語と英語しか解さないと答えた75歳の男性回答者もいる。

質問Ⅰは兄弟姉妹との談話で用いる言語を問うものである。兄弟姉妹のいる回答者32名の中でもともと兄弟姉妹の母語がカビテ語でない者が4名いる。この4名を除いた28名中6名が現在も回答者と同居している。彼らのうち4名はカビテ語とタガログ語と英語の三言語併用で、1名はカビテ語とタガログ語の二言語併用である。残りの1名、37歳男性回答者の場合は極めて異例である。つまり、同居しているにもかかわらず、兄弟姉妹はカビテ語からタガログ語に言語を切替えて (language shift) しまっているのである。家庭外にある兄弟姉妹の場合は、カビテ語のみと答えたのが11名、カビテ語とタガログ語の二言語併用が6名、カビテ語と英語の二言語併用が1名、カビテ語とタガログ語と英語の三言語併用が5名である。このグループにも兄弟姉妹の言語がタガログ語に切替え (shift) られた例が2例、27歳と54歳の

男性回答者の場合に見られる。逆に、前出25歳の男性回答者は、配偶者と子供に対してと同様、カビテ語が母語でない兄弟姉妹に対してもタガログ語にカビテ語を併用して話しかけている。

1. 2. 3. コミュニティーにおける多言語併用

一般にコードの切替えは (switching) は談話の場と参加者に応じて変化する。どの言語に切替えるかを決定する大きな要因としてほかにも話題と意図があるが⁹⁾、今回の調査ではアンケート用紙に記入してもらう方法を取ったので、場と参加者だけを前提とした質問に限った。質問MとNは参加者としてそれぞれ近所の人と友人を想定したもので、質問Oは商売に限らず市場でのやりとりを含めた場を想定したものである。質問Pでは、公の書簡には法令によりフィリピン語ないしは英語を用いるように指定されているので、私信の場合を想定してある。これらの質問は、参加者や場により使い分けられる言語の頻出度を通して、区

	A	B	C	M	N	O	P
1.	m	25	Cav.	C. T.	C. T.	T. E.	T. E.
2.	m	27	Cav.	T.	T.	T. E.	T. E.
3.	f	30	Man.	T.	E.	E.	E.
4.	f	33	Cav.	C. T.	T.	T.	C. T.
5.	m	37	Cav.	C. T.	T. E.	E.	T. E.
6.	m	38	Cav.	C. T.	C. T.	C. T.	C. T. E.
7.	m	38	Cav.	C. T. E.	C. T. E.	C. T. E.	T. E.
8.	f	39	Cav.	C. T.	C. T.	C. T.	T. E.
9.	f	41	Cav.	C.	C.	E.	E.
10.	m	42	Cav.	T.	T.	C. T.	C. T. E.
11.	f	44	Cav.	C. T.	C. T.	T.	C. E.
12.	m	45	Cav.	C. T.	C. T.	T. E.	T. E.
13.	m	45	Cav.	C. T.	C. T.	T. E.	T. E.
14.	f	48	Cav.	T. E.	T. E.	T.	T.
15.	m	49	Cav.	C. T.	C. T. E.	C. T. E.	T. E.
16.	f	53	Cav.	C. T.	C. T.	C. T.	T. E.
17.	m	54	Cav.	T. E.	C. T. E.	T. E.	T. E.
18.	m	56	Cav.	C. T. E.	C. T. E.	T.	C. T. E.

19.	m	57	Cav.	C.	T.	E.	T.	E.	T.	E.	T.	E.			
20.	f	58	Cav.	C.	T.	E.	C.	T.	E.	C.	T.	T.	E.		
21.	f	59	Cav.	C.	T.		C.	T.		C.	T.	E.	E.		
22.	?	59	Man.		T.		T.			E.		T.			
23.	m	62	Cav.	C.	T.		C.		C.	T.	C.		E.		
24.	f	64	Cav.		T.		C.	T.		T.	E.		E.		
25.	m	64	Cav.	C.	T.	E.	C.	T.	E.		E.		E.		
26.	f	64	Ban.	C.	T.		C.	T.	E.	T.	E.		E.		
27.	m	71	Cav.	C.	T.		C.	T.		T.		C.	T.		
28.	f	72	Cav.	C.			C.	T.	E.	C.	T.		C.	T.	E.
29.	f	74	Olon.	C.	T.		C.	T.	E.		T.	E.		E.	
30.	m	75	Cav.	C.	T.		C.			C.	T.		T.	E.	
31.	f	75	Cav.	C.			C.	T.	E.	C.	T.		C.	T.	E.
32.	m	77	Cav.	C.	T.		C.			C.	T.		T.	E.	
33.	f	79	Cav.		T.	S.		T.	S.	T.			E.		
34.	f	82	Cav.	C.	T.		C.	T.		T.		C.	T.		
35.	f	83	Cav.	C.	T.	E.	C.	T.	E.		E.		T.	E.	
36.	f	83	Cav.	C.	T.		C.	T.	E.	C.	T.		E.		
37.	f	89	Cav.	C.	T.		C.	T.		C.	T.		E.		
38.	f	?	Cav.	C.	T.		C.	T.	E.		?		E.		
39.	m	?	Cav.	C.	T.		C.	T.		C.	T.	E.		T.	E.

表4：コミュニティーにおける話者の多言語併用状況

別的多言語併用の実態を調査するため設定された。

参加者が近所の人の場合と友人の場合とでは、カビテ語とタガログ語の頻出度に大差はないが、友人との談話には英語がより多く使われていることが表4の分布から分かる。Asuncion-Landé & Pascasio (ibid : 220-223) によると、フィリピン語（タガログ語）と英語はL言語とH言語の関係にあり、親しい仲間が家に集まる場合はフィリピン語で、学校ではほぼいつも英語、社会的な会合ではフィリピン語よりも英語で、というコードの切替えが見られるという。一般に日々の生活に根ざした近所同士の談話よりも友人同士の談話のほうが使用領域の面で改まった場を多く含むことと、カビテ市ではカビテ語話者が地区により集住していることを考慮すれば、英語のみを用いる1件も入れて、近所の人よりも友人に対して英語を併用すると回答した者の数が倍以上に達している

ことの説明がつく。多言語併用でも、カビテ語とタガログ語の組み合わせが減り、その分カビテ語とタガログ語に英語を組み合わせた併用が増えて

いる。 商売の交渉や市場での買い物を想定した質問Oの回答では、カビテ語を単一に用いる者は無く、一方、タガログ語を単一に用いると答えた者が最も多い。また、英語を単一に用いる者も急に増える。とは言え、この領域ではカビテ語とタガログ語の併用が最も多い。英語の頻出度が高まったのは、回答者のなかに何人か商店主が含まれているためと考えられる。コミュニティー外部との交渉では英語が優先される傾向は夙に指摘されているとおりである¹⁰⁾。領域が市場の場合には、働いている人々が必ずしも地元出身者ではないので、タガログ語の占める割合が質問M、N、O、Pの回答の中で一番高い。また、スペイン語がまった

カビテにおけるスペイン語系クレオール話者の現状について

く使われないのは、売手の側に社会階層の上部を占める人々ないしはその階級の出身者がいないためであろうが、前述したようにスペイン語は高位変種であり市場という領域には不向きであることも理由の一つに数えられる。

私的書簡を想定した質問Pへの回答では、単一使用の11件も含めて英語が群を抜いて多く、多言語併用でも英語とタガログ語の組み合わせが最も多い。これは、私的書簡であっても談話に比べれば改まった場であり¹¹⁾、公の書簡に準じて使用言語に英語とタガログ語が多く選ばれるためと思われる。スペイン語が使われないのは、高位変種でありながら実際のスペイン語話者が極端に少ないためであろう。

2. カビテ語復興の動き

言語Aは他の優勢な言語Bの圧力下に置かれると、言語の取り替えを引き起こして衰微し、さらに子供の世代に引き継がれないとやがて消滅する。カビテ語の場合にはすでに言語の取り替えが起きつつあることは1. 2. 2. で見たとおりである。衰微する言語を復興させるには、Holmes (ibid : 75) が指摘するように、学校の教科にその言語を取り入れて教えるか、その言語を学校の教科の説明に用いる浸漬法 (immersion) による教育を行うのが望ましい¹²⁾。しかしながら、それには教材の作成、教師の養成、カビテ語話者の理解と熱意復興を支援する政策や行政側の資金援助など、解決すべき問題が山積している。今回の調査ではカビテ語復興運動に取り組んできた三人の活動家にインタビューをおこない、こうした現状の中でのそれぞれの活動内容について尋ねた。

2. 1. Norma C. Bersabe 女史へのインタビュー

女史は老齢にもかかわらず、*Lenguaje de Chavacano* (1992) や *Lecciones de Chavacano* (1994) などのカビテ語教科書を精力的に編んできた人物である。発言の要旨は以下の通りである。

「1992年から1年半、小学校の教室を借りて洋裁を教える傍ら、有志の女性たちにカビテ語を教えたが、地方教育委員会の教育長がカビテ語を解さないタガログ語話者の人だったので、カビテ語の教育を小学校の教室で行うことに理解を示さず、それが原因で何回か意見が衝突した。当時、自分も心臓を患っていて休養を必要としていたので、カビテ語のクラスを畳むことにした。その後、ある高校の教師が自分が書いた教科書に興味を持ち、彼女もまたカビテ語話者だったので是非にと請われてしばらくカビテ語を教えたことがあったが、やがて息子のいるオーストラリアに渡ってしまい、そのままになっている。また、今までに作った手書きの教科書を出版しようと申し出てくれた人が二月ほど前に現れたが、その後音信がないので連絡を待っているところだ。」

2. 2. Jesus I. Barrera 氏へのインタビュー

氏は、1995年に再選を果たしたカビテ市長 Timoteo O. Encarnacion 氏から副市長に任命された若手の政治家で、副市長になる以前からカビテ語復興を熱心に市当局に訴えてきた人物である。発言の要旨は以下のとおりである。

「カビテ語復興の具体的計画は、リーダーに自身カビテ語に堪能なカビテ州教育委員会教育長補佐の Enrique Escalante 氏を迎えて、去年ス

タートしたばかりである。現在、氏はカビテ語の教材を準備しているが、我々の計画はカビテ語を初歩から教える教育ではなく、カビテ語をいかに教えるかに重点がある。カビテ語と言っても地区によって多少の違いがあり、例えば San Roque 区と Calidad 区では発音などに多少のずれがある。そのため、今用意している教材は標準カビテ語の確立をめざしたもので、発音、正字法、実際の会話のパターンの整備に特に力を注いだ内容となっている。今年にはスペインからの独立運動に尊い命を捧げた13人の愛国者の百年忌にあたり、市としては盛大な行事を用意しているが、その事業の一環としてパンフレットを作成して、そこに我々が準備を進めている教材の一端を紹介するとともに、カビテ語と母体となったスペイン語やタガログ語の違いについても触れることになっている。標準カビテを確立して教育するということは、我々の文化を豊かにすることであるし、次代から次代へとこの言語が受け継がれていくことで、我々のアイデンティティを求めるよすがともなる。幸い現市長は自身がカビテ語に堪能であり、市の幹部たちもほとんどがカビテ語話者である。それに何よりも我々はチャバカノ（カビテ語）のコミュニティーの一員として結びついている。したがって、市はよろこんで我々のこの遠大な計画をバックアップしてくれるものと信じている。また、州に対しても、いずれ Escalante 氏が教育長補佐から教育長になれば、市と州との太いパイプ役となって、学校教育へのカビテ語の導入を推進してくれるものと期待している。」

2.3. Enrique Escalante 氏へのインタビュー

氏は、Barrera 氏へのインタビューでも名前

が現れたが、カビテ州内の全公立高校で英語を巡回して教えるかたわら、カビテ州教育委員会教育長補佐も勤めている。目下、カビテ語教師の育成に向けて教材を執筆中であり、前出の Barrera 氏とともにカビテ語復興運動のグループを結成している。発言の要旨は以下のとおりである。

「現在、カビテ語の教材を作っているが、それは教師のためのもので、せいぜい12課から20課程度の薄いものとなるはずだ。しかし、今、大きな問題にぶつかってしまっていて、筆が思うように進まないでいる。それは音韻論上の問題で、スペイン語からの語彙をスペイン語の綴りのままに書くと、実際のカビテ語の発音とは異なってしまふ。では、音声学的な観点にたった表記法を取ればよいかというと、今度は変異体が多くなってしまい、従来見慣れている綴りの言葉とは違う意味を持つものと誤解される恐れがある。例を挙げよう。出身を尋ねるスペイン語の *De dónde?* はカビテ語では *De donde?* であるが、この *de* の発音は [de] ではなく [di] である。しかし、この前置詞 *de* を *di* と書いてしまうと、未来を表す小辞 *di* と見分けがつかなくなる。そこで、こうした場合には *i* にアクセント符をつけて *dí* として区別することもできるが、果してそれが正しい解決策かどうかは分からない。さまざまな同音異語があるからだ。また、音声を忠実に表記しようとして、たとえば従来のスペイン語式の *estudiante* に換えて *estudianti* と書くと *ti* の [i] はそのまま [i] として発音されてしまうが、実際にはこの音は [i] と [e] の中間の音である。そこで、こうした異音には文字の上にバーを付けて表記しようか、それとも括弧でくくるかしょうかとも思う。しかし、そうなると表記は極めて複

雑になり、教育的効果から見てかならずしも良いとは言えない。今、こうした問題を前に解決策を模索しているところである。」

3. 調査結果の分析

3. 1. 区別的多言語併用とコードの切替え

カビテ語は1. 2. 1でも述べたように、支配階級と準支配階級の言語であるスペイン語と非支配階級の庶民のタガログ語との出会いから生まれたクレオールであるという認識が一般的である¹³⁾。また、極一部の高齢者の間ではいまだにスペイン語が行われているという事実がある。これが意味するものは二つある。一つはスペイン語は旧支配階級の末裔の言語であるという認識が人々のあいだにあるということ。もう一つは、1949年の Sotto 法により中高等教育機関でのスペイン語学習が義務化され、さらに1952年の Magalona 法で全大学と高校におけるスペイン語の必修が義務づけられてから、1973年の憲法改正によりスペイン語が公用語でなくなるまで¹⁴⁾、スペイン語に堪能であるということは学習能力の高さと経済的豊かさの象徴と見なされた時期があり、その価値観が今でも中高年層の記憶に生き続けているということである。そして、このことは間接的にはあるが、スペイン語に良く似ているカビテ語に価値を見いだすようすがともなっている。一方、タガログ語はカビテ州が属す行政単位である南部タガログ地方¹⁵⁾という言葉が示すように州の土着言語であり、カビテ州の南に隣接するバタンガス Batangas 州がその本拠地と言われる。タガログ語はまたフィリピン語すなわち国語でもあるから、その話者は他の土着言語より高い価値を自らの言語に付与している。英語は今でも高学

歴、社会的成功、現代化の象徴として機能している実態があり¹⁶⁾、学校教育では前述したように教科の学習ばかりでなく、より高い教育機関に進学する上で必要不可欠な言語でもある。こうした状況を背景として、カビテ市ではカビテ語、タガログ語、スペイン語、英語の四言語を構成要素とする区別的多言語が形成されている。

以下、質問 I から P までの回答を概観して、カビテ語話者の多言語併用における階層性と使用領域に応じたコードの切替えの特徴をまとめてみることにしよう。表 5 と表 6 は、回答者が家族との談話に用いる言語名が全員の回答の中で現れる頻出度と、その言語の組み合わせの頻出度を示したものである。() 内の数字は単一に用いると答えた者の数である。また、表 7 と表 8 は同様に家族以外の参加者と場における言語名と組み合わせの頻出度を示したものである。Edwards (ibid : 73-4) はコードの切替えに、一部に他言語の決まり文句を入れ込む tag-switching、一つの文に他言語の単語を織り込む intrasentential mixing、および文の一部から他言語の文に切り換える intersentential switching の例を挙げているが、カビテ語話者の場合にはもっぱら intersentential switching と談話の途中から他言語に切替える temporary language shift とも言うべきコードの切替えを行っている¹⁷⁾ のが観察された。したがって、回答者の多言語併用の組み合わせも、このような方法で行われていると推測して良い。

	I	J	K	L
Caviteño	16 (9)	32 (15)	20 (8)	27 (12)
Tagalog	14 (7)	21 (3)	20 (5)	21 (3)
English	2	7	6	13
Spanish	2	2 (2)	0	0

表5：家族間の談話相手による各言語の頻出度

	I	J	K	L
C. + T.	5	10	10	6
C. + E.	0	0	1	1
C. + T. + E.	0	6	2	9
C. + S.	2	0	0	0
T. + E.	2	1	3	3
T. + S.	0	0	0	0

表6：多言語併用の組み合わせと頻出度①

	M	N	O	P
Caviteño	31 (3)	30 (4)	16	10
Tagalog	36 (5)	34 (4)	32 (7)	26 (2)
English	8	17 (1)	19 (6)	34 (11)
Spanish	1	1	0	0

表7：参加者と場による各言語の頻出度

	M	N	O	P
C. + T.	22	13	12	3
C. + E.	0	0	0	2
C. + T. + E.	6	13	4	5
T. + E.	2	3	9	16
T. + S.	1	1	0	0

表8：多言語併用の組み合わせと頻出度②

「親しさ」の度合いを一つの目安として表5と表7を比較すると、家族内ではカビテ語とタガログ語が優勢であり、この傾向は家族外であっても近所や友人との談話では変わらないが、市場や商売あるいは私信の場合にはタガログ語と英語が優勢になる。これは、「部族の集落」に語源のあるバランガイという最小行政単位で、地域の人が家族のように密接に結びついて生活していることと関係があると思われる。

各言語について見ていくと、カビテ語は家族内ではタガログ語よりも優勢であり、単一に使われ

る言語としてもカビテ語がもっとも多い。しかし近所や友人との談話ではタガログ語がカビテ語を若干上回り、市場や商取引あるいは私信ともなるとカビテ語はもはや単一では使われなくなる。タガログ語は家族内ではカビテ語に次いで良く使われるが、他の言語と比べて最も多く使われるのが市場や商取引で、近所の人や友人との談話での使用がそれに次ぐ。英語は家族内では兄弟姉妹との談話を除いてカビテ語、タガログ語の三分の一の使用頻度で、比較的良好に使われる兄弟姉妹の間でも単一的に使われることはない。同じことは近所の人との談話でも言えるが、友人との談話になると兄弟姉妹との場合とほぼ同じ頻度で使われていることが表の分布から見て取れる。しかし、市場や商取引では英語はタガログ語の使用頻度の三分の二にまで達し、カビテ語を上回っている。さらに、私信となるとタガログ語やカビテ語を大きく上回り、単一的使用の面でも群を抜いているのが注目される。スペイン語は極めて例外的存在として、高齢者が自分の親の思い出を蘇らせるなかに生きつづけているか、配偶者、近所、友人のほんの一握りとの間にしか使われていないし、次代に伝えようと意図している回答者もない。市場や商取引や私信の領域ではスペイン語はすでに死語となってしまうと言える。

多言語の組み合わせの点では、全体的に、家族内では兄弟姉妹との談話、家族外では私信の場合を除いて、カビテ語とタガログ語の併用がもっとも多い。特にこの組み合わせは、家族内では親子や子供との談話、家族外では近所の人との談話で好まれている。次に多い組み合わせは、カビテ語、タガログ語、英語の三言語併用で、なかでも友人との談話ではカビテ語とタガログ語の二言語併用と

カビテにおけるスペイン語系クレオール話者の現状について

並んでよく用いられている。タガログ語と英語の二言語併用はマニラ首都圏でもっとも多く観察される場所であるが、カビテ市においては日常の談話よりも書簡での使用が際立っている。その他の組み合わせは全体の傾向としてよりも、個人的傾向として捉えたほうがよい。

以上のことから、カビテ市の区別的多言語併用ではカビテ語、タガログ語、英語（極めてまれにスペイン語）の順にL言語からH言語へと階層を成し、コードの切替えの要因としては、家族と近所の人、友人までを「親しさ」でまとめられる一つの使用域とし、そこを境に各々カビテ語とタガログ語、タガログ語と英語の優勢の度合いが入れ替わることと、その現出の様態は単一的な使用から、二言語併用、三言語併用と、話し手と聞き手の言語運用能力と各言語に対して話者が付与する価値観により、さまざまに変化することが明らかとなった。

3. 2. カビテ語の復興

一つの言語が衰微していく大きな原因に社会構造の変化がある。メキシコ副王領を通じた間接統治の時代を含めて、スペインによる統治は約三世紀半の長きにわたる。その間、カビテは前述したようにスペイン海軍工廠の基地として重要な役割を担ってきたが、アメリカの統治下に入りスペイン語の需要は急激に減っていった。それとともにこのスペイン語系クレオールは傍層としてのスペイン語を失っていく。この時に、カビテ語には二つの道が残された筈である。将来、死語となって話者の死とともに消滅するか、同じスペイン語系クレオールであるサンボアンガ語のように脱クレオール化 (decreolization) をしていくか¹⁸⁾で

あった。しかし、残念ながら脱クレオール化の道をカビテは歩めなかった。なぜならば、スペイン海軍が去ったあと、アメリカ海軍の基地として町は発展してきたため、英語は始めからH言語としての地位を無条件に付与されていたし、タガログ語はカビテ州の土着言語であり、今や国語であるフィリピン語の母体でもある。そして、何よりもマニラ首都圏からあまりにも近すぎた。

今回のインタビューを通じて、カビテ語復興運動が少しずつではあるが行政レベルでも進みつつある印象を受けた。しかし、Escalante 氏の発言にあったように、ひとつの土着言語となったクレオールから「標準語」を作り出すのは容易なことではない。その一方では話者は確実に減りつつあり、貴重なインフォーマントの消失に加えてカビテ語の使用領域がますます狭められ、それがカビテ語の価値をさらに低めていき、カビテ語の言語運用能力を持つ者も使わなくなり、次代に引き継いでいこうとする意欲も喪失していく、という悪循環がすでに始まりつつある。その意味でも、氏の作業の完成は焦眉の急であると言える。と言うのも文字化、標準化、近代化は、一つの土着言語が公用語に準じる生命力を得るには避けては通れない道だからである¹⁹⁾。幸い、カビテ市は毎年ポルタ・デ・ベガの聖母の祭り (Fiesta de Nuestra Señora de la Soledad de Porta Vega) の記念事業としてかなり厚みのある冊子を発刊しており、その中に毎回カビテ語による物語、民話、詩歌などが作者それぞれの表記法により採録されているので、音韻論の基準が確立されて正字法上の問題が解決されれば、カビテ語教師のための教材や辞書作りに拍車がかかると予想される。しかし、学校教育のどの段階でどのようなカリキュラ

ムに従って取り込むかは更に先の問題であり、カビテ語復興がスペインにおけるカタルーニャ語やガリシア語、バスク語の復興に匹敵するだけの段階に達するか否か、現時点では予断を許さないものがある。

4. 結 語

筆者は、日本語も含めて世界中で行われている言語の多くは、言語系統樹が想起させる純粹培養的な発展の結果ではなく、部族や民族の移動に伴う同系統や異系統の言語の出会いがクレオールを生み、さらにそのクレオールが混淆を重ねた後の結果であるとの推論に立つ者である。スペイン語とポルトガル語系ピジンの出会いに更にタガログ語が重なって生成されたカビテ語は、発生から衰微に至るまでの流れが比較的短い歴史の中に捉えられるので、上に述べた推論を立証するひとつの言語事実としてその存在意義は大きい。

今回の現地調査は、カビテ語を言語構造から分析する試みではなく、多言語併用社会でのカビテ語の使用領域と話者のコードの切替えを明らかにするもので、その現状を余さず提示して分析すると共に一応の結論を得た。また、衰微する言語に対する社会的反応を記録に留めておくことも、今後の消長を知る上で不可欠と思い、生の声をなるべくそのまま提示した。今後のクレオール研究に本稿が僅かながらも裨益するところがあればまさに欣快である。

註

- 1) 荻原 (1994b : 486, 493) 参照のこと。
- 2) フィリピン語はタガログ語を母体として人工的に作られつつある国語である。詳細は荻原 (ibid : 493) 参照のこと。ただし、Asuncion-Landé

& Pascasio (1979 : 212) によれば、マニラおよびその周縁部に話されている言語は、人々の間で Manila Tagalog や Taliba style あるいは単 Tagalog と呼ばれていて、改めて Filipino と称されることはない。こうした傾向は今回の聞き取り調査でも見られた。

- 3) アメリカ合衆国は1898年の統治からフィリピン独立の1946年に至るまで、大衆教育のため強力に英語教育を押し進めたが、それは金銭的にゆとりのある階級の子に十全な英語教育が行われ、そのことがエリート層の固定化という悪循環を生むに至り、多くのフィリピン人にとって英語は満足に読み書きすらできない段階にとどまるというマイナス面も持っていた (Asuncion-Landé & Pascasio ; ibid : 215)。その後、フィリピン語の普及とも相まって、現在では大衆の公用語としての地位は失われたと言う見方すら存在する (Gonzalez ; 1992 : 303)。因みに、Social Weather Station (1994 : 85-93) が1993年に全国1200名の成人を対象に行った調査によると、英語の読む、書く、聞くの三つの能力において完璧な者は全体の18%、ある程度の能力を有する者が43%、僅かながら能力を有する者が35%、そして全く英語を解さない者が4%という結果が現れている。
- 4) Olongapo はマニラの北西部に位置する町で、海外最大と言われたアメリカ海軍の Subic 基地があったことで知られている。
- 5) Bantayan はセブ島北部に隣接する島である。
- 6) H言語とL言語については Ferguson (1959)、Schlieben - Lange (1978)、Fasold (1984)、Holmes (1992)、Edwards (1994) らを参照のこと。
- 7) louapre (1990 : 141) による。ただし、タガログ語は豊富な接辞により非常に多くの派生形を生じるので、語根として入ったスペイン語の語彙は1万語をかなり下回ると思われる。
- 8) 石井米雄監修『フィリピンの事典』(1992 : 95) による。
- 9) 詳細は Holmes (ibid : 12-53) 参照のこと。
- 10) Asuncion-Landé & Pascasio (ibid : 221) によると、依頼や報告事項、苦情には英語が多く用いられるという。またフィリピン諸語は互いに意志疎通可能を限界点として分類しても108種に分かれ (McFarland ; 1994 : 83)、国語としてのフィリピン語の普及は地方によっては英語より遅れている場合もあるので (Lipski ; 1992 : 222)、商取引やマスメディアでは英語を優先させるとい

カビテにおけるスペイン語系クレオール話者の現状について

- う事情も勘案する必要がある。
- 11) Holmes (ibid : 29-31) は言語の選択には参加者 (participants)、場 (setting)、話題 (topic)、意図を伝える機能 (function) の四つの社会的要因に加え、社会的距離 (social distance)、地位関係 (status relationship)、改まり (formality) という社会的次元が係わると指摘している。
- 12) Lipski (1987 a : 92, 1987 b : 41) によると、同じスペイン語系クレオールでありながら、カビテ語とはやや系統を異にするサンボアンガ語 (Zamboangueno) の行われているミンダナオ島のサンボアンガでは、小学校の教師の英語力不足から教室で補助言語としてサンボアンガ語が用いられており、それがサンボアンガ語の継承育成に大いに役立っているという。
- 13) 厳密に言えば、ポルトガル語系ピジンとスペイン語の間に生まれた新ピジンを基層とし、そこにタガログ語が接触してさらにピジンが生まれ、それが発達してクレオールとなった。
- 14) Madrigal Llorente (1975, 1990) を参照のこと。
- 15) フィリピンの行政単位は地方 (マニラ首都圏を含む)、州および準州、市、町、バラングイの順に下位分類される。詳細は石井監修 (ibid) を参照のこと。
- 16) Gonzalez & Bautista (1986) を参照のこと。
- 17) これはタガログ語で書かれた小説やラジオのトーク番組などでも広く行われていることである。一例として大衆小説の一節を挙げる。
- “Di buksan mo ang air-con,” mungkahi ni daddy.
 “Dad naman!” protesta ng mommy.
 “May energy crisis na nga ang Pilipinas. We should do our party in energy conversation. Kaunting tiis. Magpapaypay na lang ako.”
 (Anya dela Peña. 1992. *Ang Kick-out sa In-Crowd*, p12, Manila : Den-Mar)
- 18) Lipski (1987 a) を参照のこと。
- 19) Walker (1984) および Schlieben-Lang (ibid.) を参照のこと。
- guistic Studies in Language Contact Methods and Cases* 211-27. The Hague : Mouton.
- Edwards, John. 1994. *Multilingualism*. London : Penguin.
- Fasold, Ralph. 1984. *The Sociolinguistics of Society*. Cambridge : Basil Blackwell.
 —1990. *Sociolinguistics of Language*. Cambridge : Basil Blackwell.
- Ferguson, Charles A. 1959. Diglossia. *Word* 15 : 325-40. Also in Giglioli, Pier Paolo (ed.), *Language and Social Context*, 232-51. London : Penguin, 1972.
- Gonzalez, Andrew. 1992. Reconceptualization, Translation and the Intellectualization of a Third World Language : The Case of Filipino. In Bolton, Kingsley and Kwok, Helen (eds.), *Sociolinguistics Today : International Perspectives*, 300-22. London : Routledge.
 —and Bautista S., Maria Lourdes. 1986. *Language surveys in the Philippines (1966-1984)*. Manila : De La Salle University Press.
- Harding, Edith and Riley, Philip. 1986. *The Bilingual Family : A handbook for Parents*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Holmes, Janet. 1992. *An Introduction to Sociolinguistics*. London : Longman.
- 石井米雄監修 1992. 『フィリピンの事典』、東京、同朋舎出版。
- Lipski, John M. 1987 a. Descriollizaci9n del criollo hispanofilipino : el caso de Zamboanga. En *Revista Española de Lingüística* 17-1 : 37-56.
 —1987 b. Modern Spanish Once-removed in Philippine Creole Spanish : The case of Zamboangueno. *Language Society* 16 : 91-108.
 —1992. New Thoughts on the Origines of Zamboangueno. *Language Sciences* 14-3 : 197-231.
- Louapre, Garcia Pilar. 1990. *El idioma español en Filipinas desde la conquista a nuestros días*. Madrid : Editor.
- Madrigal Llorente, Ana Maria. 1975. Spanish Language in the Philippines. Unpublished, College of Public Administration, Manila : University of the Philippines.

参考文献

- Asuncion-Landé, Nobleza and Pascasio, Emy M. 1979. Language Maintenance and Code Switching Among Filipino Bilingual Speakers. In Winter, Werner (ed.), *Socio-Lin-*

- 1990. Situación actual de la enseñanza de la lengua española en las universidades de Filipinas. Unpublished, Manila : University of the Philippines.
- Mcfarland, Curtis D. 1994. Subgrouping and Number of the Philippine Languages or How Many Philippine Languages are there? *Philippine Journal of Linguistics*, 25-1, 2 : 75-84.
- 荻原 寛 1994 b. 「フィリピンのスペイン語系クレオール、カビテ語における性数概念」、『長崎県立大学論集』27-2, 3 : 479-96.
- 1994 c. 「マニラにおけるスペイン語話者の現状について」、『調査と研究』（長崎県立大学国際文化経済研究所）25-1 : 107-20.
- 1995. 「マニラ湾沿岸部のスペイン語系クレオールをめぐって——アスペクトとフォーカスを中心に——」、*Hispánica* 39 : 114-28.
- Schlieben-Lange, Brigitte. 1978. *Soziolinguistik-Eine Einführung*. Stuttgart : Kohlhammer. (『社会言語学の方法』、原聖他訳、三元社、1990年。)
- Social Weather Stations. 1994. Survey Findings on the Use of the English Language. *Philippine Journal of Linguistics*, 25-1, 2 : 85-93.
- Walker, A. G. H. 1984. Applied Sociology of Language : Vernacular Languages and Education. In Trudgill, Peter (ed.), *Applied Sociolinguistics*, 159-202. London : Academic Press.